

ボーダー（壁）を乗り越える会話力の可視化への試みと成果

八木 智裕^A

1. はじめに

ACTFL準拠のコミュニケーション力測定に基づきグローバル人材育成の場をつなぐ法人を標榜し、OPIcによる英語並びに日本語の評価結果を公開してきた。今回の大会テーマに沿う形で、以下の3つの視点から纏めた結果並びに考察の発表を行い今後の活動指針を得たい。①理工系人材に関し大学教育と社会が求める人材像との壁②海外留学（特に語学留学）に関する期待と実態の壁③外国籍に求める日本語会話力と日本人の英語会話力の比較から双方の壁の比較。

2. 理工系人材に関し大学教育と社会が求める人材像との壁

ICTは英語と並び今後のグローバル社会を生き抜くために必須の能力と考える。第2回北海道支部大会で、理工系学生の就職先の1つであるICT系企業の英語コミュニケーションテストOPIc適用結果（2013年頃のデータ）に関し発表[1]を行った。その際、入社後の時間は英語スキルアップに割く時間も限られていることから、大学教育においては入学時に保有している能力を再確認するような学習に留めることなく、発信・発言体験を通してグローバルと「つなぐ」場に変えていって頂きたいと提言した。

ICT関係の中でもAIやIoTへの対応により幾何級数的に人材ニーズが高まる中、最初に着目される理工系人材の実態を、平成の3つの特徴的かつ検索可能な時期に絞り表1にデータを纏める。

表1 日本における理工系大学生の位置付け推移

西暦	1998			2009			2016			CAGR(%)	
	H10(12)	H21(22)	H28(27)	Short	Long	Short	Long	Short	Long	Short	Long
GDP(兆円)	500	464	537	2.11	0.40						
第二次産業		24.4%	26.8%								
第三次産業		74.5%	72%								
大学生(千人)	2,472	2,846	2,860	0.07	0.81						
理工系(千人)	769	811	856	0.78	0.60						
同上保健 その他除く	690	623	615	-0.18	-0.63						
比率	27.9	21.9	21.5								
備考	GDPマイナス	リーマン・ボトム	Global8設立								

表1に纏められた貴重な人材に対する英語教育の成果を、当法人のグローバル人材育成における羅針盤である時間軸と空間軸を意識した形で整理し、表2の通り纏める。

表2 紹介大学の概要

大学名	地域	実施時期	評価人数	プログラム	最終平均	効果量	備考
A校	東北	'13-'16	64	語学留学	-	-	海外評価
京都大学	関西	'15	99	Writing	4.1	0.22	[2]
東京大学	関東	'15-'16	38	Mスカイプ	-	-	[3][4]
北海道情報大学	北海道	'16-'17	16	語学留学	-	-	
摂南大学	関西	'16-'17	14	多読	2.8	0.43	[5]

理工系学生は実験・研究等で忙しいと言われる。表2に紹介させて貰った大学の講義・留学は、効果をエビデンスとして紹介することにより学生の参加意欲を喚起することが可能であろう。エビデンスの無い大学や興味の薄い学生においては、彼らの興味領域を活用したグローバル人材育成プログラムの紹介や取組が有用ではなかろうか。その中から、英語コミュニケーションテストOPIcも適用したプログラムを表3として纏める。その結果に一喜一憂するのではなく技術者魂を喚起し、課題の解決等を通して特徴を共有化しリソース・機会を活かす挑戦を促したい。

表3 紹介プログラムの概要

プログラム特徴	実施時期	評価人数	備考
AI利用の英会話学習	'18-'19	37	[6]
リサーチインターンシップ	'19	98	[7]

以上のような取組概況は第5回北海道支部大会でも紹介[8]させて頂いたが、最近の理工系人材活用企業における一歩踏み込んだOPIc活用状況の紹介も加え、壁の実態と解決策の材料を提供したい。

3. 海外留学（特に語学留学）に関する期待と実態の壁

グローバル人材育成に向け、学内授業・企業研修において色々な取組が行われているが、それは文部科学省がグローバル人材で定義する各要素の部分獲得・向

上・鍛錬の域に留まることが多く、全ての要素を総合的に学ぶ海外留学に勝るものは無い。

ただ海外留学でも語学学習・異文化体験型等工夫はされているものの経済的・時間的制約を考えたベストマッチは難しく結果として目的・効果・成果の曖昧な体験型或いは極論すると海外旅行？と疑われるケースも見受けられる。

このことは海外留学では無いが、海外赴任時に短期インターンシップ研修等を受け入れた際に現地スタッフのモチベーション低下を招いた経験によるものである。そこで青山学院大学からの依頼を契機[9] にコミュニケーション力の可視化サービスに拘った「つながり」設計を行っている（EVEサービス[10]）。

学内授業・企業研修においてACTFLに準拠した言語コミュニケーション力の評価をCBT(OPIc)で検証・改善が進む反面、海外留学における文部科学省がグローバル人材で要素I（語学力・コミュニケーション能力）と定義する効果検証や改善が思うように進んでいないように感じる。

開示許諾を頂いた事例を検証することにより、経済的・時間的制約を少しでも踏まえた海外留学或いは留学以前の疑似学習との「つながり」について第5回中国四国大会でも叩き台として8つの可能性として発表[11]させて頂いた。

4. 外国籍に求める日本語会話力と日本人の英語会話力の比較から双方の壁の比較

今年4月1日施行された改正入管法で5年間で34万人強の新たな外国人労働者の受入れ計画に端を発して、日本語能力の評価もCEFR基準や発信型能力と、日本人の英語能力同様の議論が始まった。又、2008年に公表された留学生30万人計画も、その内容実態は議論の余地があるものの概ね数的到達を迎える段階[12]ではあるが、その評価は受信系に偏り実業界においては日本人大学生の英語力同様厳しい評価がされている。自身の体験をもとにACTFLにOPIc日本語開発を働き掛けた当時より質・量とも大きく変化を遂げつつあるがまずは現状[13][14]を考察し、共通課題や異なる実態への理解を行うと共に、その意義について意見を伺いたい。

5. 総括と提言

コミュニケーション能力の可視化は、目標レベルに

向けた研鑽をガイドするのが目的ではあるが、暗黙知中心の日本社会においては日本人の英語会話力のみならず、外国籍の日本語会話力にも課題がある。しかしながら、語学留学も含めた日本人大学生の留学数を大きく上回る外国籍留学生・労働者が日本語会話力に苦勞する局面に過度な期待・甘い妥協等によるハラスメントで対応するのではなく、一緒に研鑽し新たなコミュニティーを形成する努力を行うことこそがグローバル人材育成への絶好の教育機会ではなかろうか？

行政による制度化を促すべき点も多いが、そもそもグローバル即ち多様な価値観の存在を画一的に括することは、その価値観を放棄する側面があることも理解した上で、コンプライアンス違反とならない範囲で出来る所から着手し、その効果・効用を課題も含め広げる支援を行ってきたい。

引用・参考文献(URLは全て2019年11月7日参照)

- [1] <http://www.j-agce.org/hokkaido-2/>
- [2] 金丸敏幸(2016) OPIc 導入によるスピーキングに対する意識変容の分析
http://global8.or.jp/JACET55_Presentation.pdf
- [3] <http://www.comp.tmu.ac.jp/smmlab/research/vel-cole/index.html>
- [4] 森村久美子(2016) インターネット電話スカイプを利用した海外大学との交流とその効果
https://www.jstage.jst.go.jp/article/jseeja/2016/0/2016_320/_pdf-char/ja
- [5] 松田早恵・井村誠・中西のりこ(2017) <http://jalt-publications.org/content/index.php/jer/article/view/95/36>
- [6] http://global8.or.jp/Shishido_AI_JA-CET20190707.pdf
- [7] http://global8.or.jp/NF_Research_Internship.pdf
- [8] http://global8.or.jp/JH5_Presentation.pdf
- [9] http://global8.or.jp/JAGCE_Hokkaido3.pdf
- [10] <http://global8.or.jp/eve.html>
- [11] http://global8.or.jp/JAGCE_CS5.pdf
- [12] http://global8.or.jp/JAGCE_CS5_Ms.Iwashita.pdf
- [13] 世良時子(2018年8月). CBTによる日本語学習者の口頭能力測定, 外国語教育メディア学会第58回全国研究大会予稿集, 千里ライフサイエンスセンター
- [14] http://global8.or.jp/Ms.Sera_OPIcJ@2018LET.pdf